

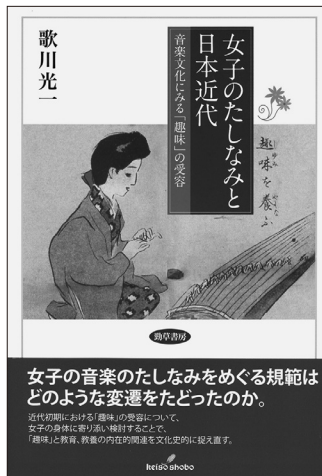
書評

歌川光一著

# 『女子のたしなみと日本近代— 音楽文化にみる「趣味」の受容』

(勁草書房 2019年)

福田 委千代



本書は、「女子のたしなみ」の近代化のプロセスについて、教育史に引き付けて明らかにしようとする論考である。教育史・芸能史・芸術史の三分野にはすでに多くの調査研究がなされているが、「女子のたしなみ」についてはその「死角」となっているという。そこに照明を当て、様々な知見を元に、具体的には「趣味」を受容していったとされる明治後期から大正期を中心に、女子の稽古文化にまつわる「花嫁修業」というイメージの成立過程について、音楽のたしなみを素材に論じたものである。本書の独自性については、序論「女子の稽古文化をめぐる連続・非連続」にもあるとおり、教育学上で学校教育の教習法と対比される、

稽古法の歴史を扱うのではなく、「近代初期における「趣味」の受容」を、「女子の身体に可能な限り寄り添いながら検討することで、「趣味」と教育、教養の内在的関連を文化史的に捉え直そうとする試みでもある」という点でも保証されよう。以下、章立に従い、各論の目的と結論を紹介する。

本論の始め、第一章「稽古からたしなみへ」において、まず考察上の視点と対象とが明確にされる。「女子の稽古文化」の歴史について、教育史・芸能史・芸術史の各先行研究で明らかとなっていることおよび課題点の両方を示した後、「たしなみ」というものに着目する理由が述べられる。教師からの教授・練習といったニュアンスの強い語彙「稽古」だけでは、「趣味」の受容の問題と関連させて稽古文化を考えることには漏れが生ずる。そこで、教育機会を限定しない視点として、「ある事物に対する、身体的な素養やそれを育もうとする態度、行動様式」としての「たしなみ」を採用することとなる。この「たしなみ」という視点から研究対象とするのが、「音楽」である（「弾きたしなみ」）。楽器を習うことにはこの時期、主体である女子の属する階級差が表れる。ために、近代教育史内

外の階層文化研究の動向を受け、対象とする女子は「都市中上流階級」とすると同時に、様々なジェンダー規範の確立期であることを考慮し、それら女子が購読する「雑誌メディア」の分析を主軸とするという研究方法が提示される。

以上の方法論によってまず論じられるのが、第二章「家庭婦人の心がけとしての音楽のたしなみ」である。近代化の途上で再編される「家庭」において「音楽」、とりわけ「西洋音楽」の導入は「一家団欒」の手立てとして注目された。こうした「家庭音楽」にまつわる婦人雑誌の言説から、洋楽の上位性ととも和楽器——とりわけ箏・三味線に対するイメージの変化が明らかにされてゆく。ピアノやヴァイオリンといった洋楽器は理想化されており、そのイメージは明治後期から大正期にかけて高止まりしたまま変わらぬが、一方の箏・三味線は前近代的・猥雑なイメージのものとして当初は俗悪視される。しかし、「一家団欒」を音楽にて具体的に実践するとなると、洋楽器ではなく和楽器に頼る方が経済的・現実的な家庭も少なくなかった。とりわけ箏については、日露戦争以降「一家団欒」実現の階層的な隔たりの解消や「性別役割分業」の確立をもたらす趣味として着目される」ようになり、相対的にその地位が向上すると、著者は指摘する。箏は、玄人女性（三味線俗悪視の理由は、彼女らとの連想の上にある）に對置する「家庭の妻」が夫を慰撫する「趣味」でもあり、女性が万が一の時に備える「婦人向けの職業」としても着目されていくのである。三味線もまた、「新中間層」の拡大した大正前期には、「子どもの稽古事」として容認されるようになる。

ついで第三章「女子の心がけとしての音楽のたしなみ」では、将来「家庭婦人」となるべき「令嬢」たちにおける「たしなみ」と、「少女」というジェンダー規範における「たしなみ」とが論じられる。まず「令嬢」たちについて、分析資料として提示されるのは婦人グラフ誌だが、これらのグラビアページに掲載された「令嬢」たちのプロフィール・キャプションに注目し、そこに各人の音楽のたしなみがどのように紹介されているかを把握するという方法が興味深い。それによれば、日露戦争後と第一次大戦後の記載を比較検討すると、ピアノの上位性は揺るがないが、注目すべきはピアノとともに箏または三味線をたしなむ数の増えている点である。また、「令嬢」たちの音楽のたしなみについては、「習得の過程」「習得の程度」までもが紹介されており、「令嬢」という規範の中で、音楽のたしなみが修養の対象として位置づいていたことが推測できる」と述べられている。一方、当時の論説記事の方では、「親の立場から娘の「趣味の偏りを防止する」という論理」を見ることができるといふ。これは、将来娘たちが嫁した先での「趣味」のミスマッチを防ぐためである。これがために、洋楽器だけでなく、和楽器も含む「ホビーの量的確保」という発想に繋がり、「令嬢」のたしなみは「和洋折衷化」したのだ、と指摘されている。他方「少女」のたしなみという括りでは、女性誌附録の「双六」を資料として扱うことで、「楽器や音楽のイメージそれ自体がジェンダー化されていた」こと、「女子にふさわしい楽器」のイメージとその変容過程が明らかにされる。「少女」のたしなみにおいて「ピアノを中心とした洋楽への志向性」が明確に表出しているのは、「令嬢」が「家の娘」と

いう位置付けであるのに対し、「異性性から遠ざけられ」ている分、「少女」における邦楽のたしなみの表象はそれほど重視されていなかったのだろうという結論である。

第四章「なぜたしなむ程度に留めるのか——女子就業論を参照に」では、以上の女子における音楽のたしなみが、なぜそれ以上に深化しないのか、という根源的な問題に移ってゆく。中上流階級の女子には趣味を以て労働する必要がなかった、という予想にも言及しつつ、著者はここで「職業案内書」と「婦人雑誌」におけるプロの音楽家・教師の言説の両面から考察する。それによれば、「職業」としての音楽家・音楽教員についての職業案内は1900年代当初からなされている。しかし、婦人雑誌において音楽家・音楽教員（当時は洋楽における職である）は「成功者」としては登場せず、プロの女性音楽家は「家庭に収まらず、その習得についても、読者が安易に目指すべきでない選択肢」という情報が提供されたという。他方、箏や三味線の師匠は憧れ目指すべき職業として紹介はされないものの、「世渡りの手段となることが強調されて」いた。すなわち、洋楽のプロは良妻賢母像に反する道であり、一方の邦楽はそれに抵触しないが、箏や三味線で身を立てること自体が芸娼妓や寡婦の苦労を連想させ、これもまた現実には「家庭」から外れ「て」見えた。ゆえに、音楽は職業として目指されず、「たしなむ程度に留める」ということになるのである。

第五章「行儀作法としての音楽のたしなみ」では、実際にたしなんだ楽器等を披露する際、相手に進める際などの礼儀作法がどのようなものであったかについて説明される。結論としては、「洋楽を通じた交際・社交のあり方」は模索期にあり、大正末期までに腕前の披露という点からすれば、「たしなみ像の西洋化は十分に果たされなかった」と考えられるという。

第六章「花嫁修業というイメージ——「趣味」の和洋折衷化と結婚準備のための修養化」では、これまでに明らかとなったことが、「近代音楽史の知見」「学校教育史研究の知見」との比較検討も含めて総括される。さらに、本書の課題として掲げてあった「今日の私たちが近現代の女子の稽古文化を、武家奉公から連続する花嫁修業として捉える見方の検証」としては、一つには各地方や個々の家の下にあった「たしなみ」が、近代「家庭」形成に必要な「家庭婦人の素養としてのテイスト」として位置付けし直され、同時に「女子のテイストの涵養にも公的な意味が付与された」こと、二つには西洋化の途上でありながら、「家の娘としての女子にとってのテイスト」が「量的に確保すべきホビー」としても捉えられ、「和洋折衷化と修養化を果たしたという構造」、三つにはたしなみを通じた「交際・社交像の西洋化」が十分に果たされなかったために、「披露より習得を重視する趣味像が普及した可能性」を指摘することができるが、こうして作りだされた規範が、現代の我々が素朴に抱く「花嫁修業というイメージ」の原型なのだと結論する。今後の課題も示された後、補論として「昭和戦前期の「令嬢」のたしなみ——「婦人画報」にみる「花嫁修業」と日本趣味」にて、じっさいに「花嫁修業」という概念が登場してくる昭和戦前期における女子の「たしなみ」が確認されている。

本書は、著者の博士論文『近代日本における中上流階級女子のたしなみ像——一九世紀末から二〇世紀初頭東京の音楽文化に着目して』に、その後の執筆の関連論文・書き下ろしを含めて再構成したものとある。「あとがき」でどのように本書のテーマと出会い、方法論を確立してきたかが詳しく述べられているが、膨大な資料と先行研究とに飽かず求められた知見が示されてある。何よりも著者の姿勢に深く感じ入る著書である。本書で示された「女子のたしなみ」という観点に立つとき、たとえば戦前の少女小説として名高い吉屋信子『花物語』の第一話「鈴蘭」が、東北の女学校で音楽教師をしていた母の、ピアノにまつわる思い出であることが、今更に興味深く思われてくる。

(ふくだ いちよ 日本語日本文学科准教授)